エッセイ

麻と古代日本の祭祀

武田　収功

はじめに

新天皇の即位に伴い11月には大嘗祭が取り行われる。大嘗祭において神御衣（かむみそ）としてお祀りする「大麻（あさ）の織物」は、「麁服」（あらたえ）と言われ、大嘗祭の時にのみ調製し・調進（供納）される。麁服は最も神聖なものとして、天皇自らが天照大神にお供えする麻織物である。この大麻の織物は阿波忌部氏が調製・供納することが伝統とされている。「麁服」と呼ばれる織物がなぜ大麻であり、古代日本では大麻がどのように使われてきたのか、それにはどのような意味があったのだろうか。

麻と神性

麻は大麻草（たいまそう）ともよばれ、ユーラシア大陸やアジア中央部の内陸地域が原産とされる1年草で、1万年以上前から人類が栽培してきた最も古い植物のひとつである。我が国では縄文時代の極めて早い時期には、麻をいろいろな形で使用していたことが考古学的な発掘から明らかになっている。その用途は、麻布、麻紙、釣り糸、弓の弦、神域との結界を意味する注連縄など、数えあげれば限がない。古代のアニミズム（精霊信仰）的な宗教から始まったとされる神道の祭祀では、布（ぬさ）が大麻（おおぬさ、たいま）であり、修祓の道具である大幣（おおぬさ）として使われている。麻は、『古事記』では天岩屋戸の条にはじめて登場する。アマテラスが閉じこもった岩屋戸の前で、玉や鏡とともに麻布（幣）を飾った賢木を岩屋戸に捧げ、占いに従って神事を進めたのが阿波忌部氏の祖神「布刀玉命」（『古語拾遺』では太玉命）である。「太玉命」は、最初に麻に関わった神として「麁服」を貢進する役目を与えられた。このときから幣（ぬさ）はただの麻布ではなく、神聖な献げ物となり、麻が現在に至るまで神性視され、神道と深い関わりができたものと考えられる。そして、麻の持つ強い繁殖力と速い成長は、生命力と魂の象徴であるとともに、神の依代であって、神が宿る麻織物「麁服」は、国家の災厄を祓い豊穣を約束する最も神聖なものとして、天皇が天照大神にお供えするという思想が生まれたのだろう。

麻の魔力

「岩屋戸隠れ」の伝説によれば、神々は岩屋戸の前で陶酔し、神憑りとなったアメノウズメの狂喜乱舞した姿に興奮していた。そこには神を招くという神聖な庭燎（にわび）が焚かれ、神聖な大麻（おおぬさ）があった。神々は庭燎の明かりを絶やさぬように大麻を投げ込んだだろう。燃やされた大麻（たいま）の煙を吸った神々は、興奮し、陶酔し、やがて幻覚状態に陥っていった。この時、神々は、大麻に自らを酔わす作用があることを知ったのではないだろうか。それは大麻（おおぬさ）の神性と大麻（たいま）の魔力が一体化した瞬間であった。

大麻の幻覚作用は、内服するより吸煙するほうが3～4倍強いと言われている。紀元前4世紀のスキタイのバジリク古墳から、炭化した種子と吸煙用具が見つかり、幻覚性大麻の加熱吸煙が行われていたことが明らかにされている。この時代、人々は麻の種子を燻して吸煙すると、幻覚症状を引き起こすことを既に知っていたと考えられる。これは大麻の成分が加熱される過程で幻覚性の活性成分に変化する可能性があることを示している。ヘロドトスはその著書『歴史』中で、スキタイ人と同人種のマッサゲタイ人は、麻の実を火中に投ずる習慣を持っていたという。「彼らが大勢一箇所に集まって火をおこし、火を囲んで車座となり、この実を火の中に投げ込む。火中に投じられた実の焼けるにおいを嗅ぐと、あたかもギリシャ人が酒に酔うように、彼らはそのにおいに陶酔するのである。投げ込まれる実の数が増えるにつれて、彼らの酔いも増し、ついには立ち上がって踊り狂うに至るという」と記している。ここに書かれた状況は、まさに岩屋戸の神々そのものではないか。

麻の魔力の主成分テトラヒドロカンナビノール（THC）の薬理作用は、精神に及ぼす作用で、幻覚、陶酔作用、多幸感、興奮状態と思考の分裂、現在と過去・未来が入り混じった観念の混乱、時間・

空間感覚の錯誤、妄想、感情不安、幻視、衝動的行為など、精神異常作用が発現するのが特徴である。麻の種子は食用油や麻子仁（マシニン）などの生薬として漢方薬にも利用されているが、葉や雌麻の花穂はバッズといい、この部分から得られる樹脂は、幻覚作用を持つＴＨＣを多く含みマリファナと呼ばれる。この樹脂をさらに精製するとより幻覚性の強いハッシシとなる。麻は数十種類ある個体からいずれもＴＨＣは検出されるが、その含有率は生育地の気候・風土に左右される。また大麻草は遺伝的柔軟性を持ち、多くの変種にはＴＨＣの含有率に著しい差がある。日本には縄文時代伝来したとされる麻は、繊維などを得るための個体種であり、ＴＨＣの含有率が０．０８～１．６８％とマリファナ効果のある麻（２～２５％）に比べ少なく、宗教的秘事や快楽の目的とする為ではなかったようにも考えられる。しかし、３２００年前の縄文時代早期から後期の千歳キウス４号遺跡の盛土の焦土から、炭化した麻の種子が発見されており、この時代、既に人々は麻の種子を燻して吸煙していたと推察される。

麻とシャーマン

２０１０年、纏向遺跡群の３世紀中頃と推定される大型建物の南側の大型土抗から、大量の桃の種とともに麻の花粉と種子が発見された。絹織物で作られた巾着も発見されており、その口紐は麻紐で作られていた。桃の種は西暦１３５～２３０年頃のものとみられ、卑弥呼の時代と一致しているという。桃の実は「記紀」でも避邪の魔よけになっており、そこには道教の神仙思想がうかがえ、この時代には既に道教が浸透していたことがわかる。麻の種子は炭化しておらず、火に燻らした形跡もなかった。しかし、麻の種子が桃と同じ場所から発見されたことは、麻の種子も桃の種子と同様、祭祀に使われたことを推知させる。纏向遺跡群の箸墓古墳は卑弥呼の墓と推定されているが、『魏志』倭人伝によれば、卑弥呼は「鬼道で人を惑わせた」とある。「鬼道」は、道教では「魂」や「霊魂」のことであるが、「呪術」でもあり、卑弥呼が桃や麻の種子を使って、シャーマンとして呪術を行っていた姿を想像させる。麻に不思議な効用があることを知っていたかもしれないシャーマンは、麻の種子や葉・花穂などを使って祭祀を行っていたと考えてもおかしくない。速い成長と強い繁殖力などから麻は大量に収穫でき、その花穂や種子を大量に火に燻せば、十分酩酊状態、幻覚状態に入ることが可能だろう。祭司としてのシャーマンは、大麻の幻覚作用によって入神（トランス）状態になることを経験上知っていたと考えられる。大麻による魔力を知ったシャーマンは、陶酔や興奮、幻覚状態をない交ぜにしながら祭祀を行っただろう。

火を用いる祭儀は、ゾロアスター教やバラモン教に起源を持つとされる密教の「護摩焚き」に現在も伝えてられている。神道や修験道においても、護摩木とともに切麻（きりぬさ）や麻の種子や茎などを焚上げる。護摩祈祷の間、ＴＨＣを含むこの煙を吸うと、やはり陶酔し幻覚に見舞われたような「麻酔い（あさよい）」という現象がおきるという。我が国では、麻畑に入ると酒に酔ったかのような気分になることや、夜泣きする赤ん坊を麻畑に連れて行くとぐっすり眠るようになるという話も伝わっている。また、麻農家で「麻打ち」と呼ばれる作業中に、陶酔した気分になる「麻酔い」は古くから知られている。

古代日本と幻覚剤

飛鳥時代、グローバルスタンダードになりつつあった仏教や、古神道にも、渡来人がもたらした宗教儀礼や寺院建築などの文化、技術が影響を与えていたことは述べるまでもない。

ゾロアスター教は５世紀ころ、ペルシャからの胡人（ペルシャ人やソグド人）の商人らによる交易活動によって、中央アジアから中国に伝わった。中国では祆教（けんきょう）（または拝火教）といい、教徒たちの拝火の殿堂である祆祠（けんし）もあった。松本清張は、「唐や隋の時代以前から、ゾロアスター教を崇拝する胡人の商人や司祭は、幻覚性の神酒「ハオマ酒」を使い妖術や幻術を操つり、宮廷の人事、政治、経済に大きな影響を与えてきた」と述べている。祆教は、中国では伝道活動をほとんど行わなかったが、ペルシャから

我が国に移入された文化は、胡人の技術者や祆教信者らを通して大和朝廷には既に伝わっていた。『日本書紀』皇極・斉明天皇の条では、女帝の秘儀や神秘性という霊的な資質を通して、呪術性を包含する道教への宗教的傾倒を示す事例（後述）をうかがわせているが、同時に、そこには祆教（ゾロアスター教）の祭祀の儀礼形態をも内包しているようにも考えられる。たとえば、皇極天皇が行った牛馬の供儀や、四方拝による雨乞いの祭儀などは、道教思想の呪法と関係する事象とされている。一方、ゾロアスター教の牛の供儀では、幻覚性を持つという神酒「ハオマ酒」との儀礼が不可分とされており、これらの祭祀には呪術・陶酔・幻覚など、シャーマン特有の入神（トランス）状態と言う共通項がうかがえ、そこには道教とゾロアスターの要素が混在していたように推察される。上田正明は「巫女王と言うのは、卑弥呼のようにシャーマン的要素が濃厚で、女王として君臨する二つの顔を保有する王者である。マツリゴト（祭事）とマツリゴト（政事）は未分化であって、カミまつりの機能を濃厚に保持しながら政事をした女王を指す」と述べている。この説によれば天皇である皇極・斉明も、その祭政においてシャーマンとしての能力を持ち合わせていたと考えてもいいだろう。

ゾロアスター教の祭祀儀礼で使われる神酒は「ハオマ酒」、または「ハオマ」と呼ばれ、ゾロアスター教の聖典『アヴェスター』には、「生命力を高揚させ、死を遠ざけるもの、それは神聖化され、神格化され神とされる」とある。『アヴェスター』の訳者の伊藤義教は、「ハオマ酒」は「中枢興奮作用や超経験的な力を持ち、超幻覚を呼ぶ」と記している。「ハオマ酒」の原料となる植物は、石榴、葡萄、大麻、麻黄などが推定されているものの、『アヴェスター』にはこの神酒がどのような種類の植物で、どのように作られたか、また、「ハオマ酒」の幻覚性成分についても明確に語られてはいない。伊藤義教は「ハオマ酒」に使われている植物は「麻黄」（マオウ）と推定しており、山崎幹夫も生薬学、毒物学、薬理学的な立場からこれを支持している。「麻黄」には中枢神経興奮、交感神経興奮様作用、発汗、利胆、抗炎症、抗アレルギー作用などがあり、その主成分はアルカロイドのエフェドリンである。エフェドリンは、その化学構造の一部を変換すれば覚醒剤として有名なメタンフェタミン（ヒロポン）になるという。ＴＨＣの陶酔、幻視、幻覚性と、エフェドリンやメタンフェタミンの神経興奮作用や覚醒作用とを比べると、ほとんど反対の薬理作用のように思える。「ハオマ酒」の成分は「麻黄」のエフェドリンなのか、それとも大麻のＴＨＣなのか。紀元前１００年頃、ゾロアスター教の神官（マギ magi）達は、大麻を荒行、幻術の目的で用い、大麻によって得られる幻夢を占いに利用していたという。この時、神官達はなぜ「ハオマ酒」を使わず大麻を使ったのか。やはり「ハオマ酒」は大麻だったのだろうか。

斉明天皇は、多武峰に道観（道教寺院）である「両槻宮」（ふたつきのみや）を築き、神仙境の天宮（あまつみや）とした。先にも述べたように、ここでもその祭祀には道教が色濃く反映している。一方で、苑池や須弥山石を囲む饗応施設の建設、ペルシャの風習と言われる盂蘭盆会の開催、ペルシャ人王族の庇護、そして不思議な石造物と祭祀との関係などを考えると、やはりペルシャの文化との交流の中で、ゾロアスター教も、斉明の祭祀と関わりがあるようにも思える。松本清張は、『火の路』で、斉明天皇を「祭祀に幻覚剤を使ったゾロアスター教徒かも知れない」と読者に印象付けた。この幻覚剤こそ「ハオマ酒」であり、その正体は大麻ではないかと。しかし、幻覚などの効果を持つ植物は他にも沢山あるだろう。「幻覚」や「陶酔」や「覚醒」などと言うキーワードだけではその植物を特定できない。ただ、『アヴェスター』を読むと、今まで報告されていない植物を推察させる文章が数箇所あることを記しておきたい。

女帝が行った祭祀がどのようなものであったか推測できないが、道教的な要素とゾロアスター的な要素を包含させたものであったとすれば、その祭祀には「妖しげな麻薬のような何か」が使われたかもしれない。それは「大麻」なのか、「麻黄」なのか、それともまったく違う植物なのだろうか。

おわりに

古代、秘事や未来を察知する呪術や宗教的行為は、政事との関わりを持ちながら人々を未来へと導いていった。数ある植物のうちのひとつである麻が、その幻覚性を通して、世界の国々の政治や経済や人々の人生にどのように関わってきたのか興味が尽きない。

参考文献・図書

・厚生省薬務局麻薬課編「大麻」（昭和51年）
・明日香村「続　明日香村史」上巻（平成18年）
・金原正明「纏向学研究」纏向研究センター研究紀要　第1号　41-62（２０１３）
・船山信次「アサと麻と大麻ー有用植物から危険ドラッグまでー」ファルマシア（日本薬学会）、52、821-831（２０１６）
・山本郁男「大麻文化科学考（その１）」北陸大学紀要　第14号、1-15（１９９０）
・山口博「大麻と古代日本の神々」宝島社新書（２０１４）
・斎部広成撰「古語拾遺」岩波文庫（２００４）
・上田正明「古代日本のこころとかたち」角川書店（２００６）
・上田正昭、千田稔「飛鳥の覇者」―推古朝と斉明朝の時代―　文英堂（２０１０）
・山崎幹夫「毒の話」中央新書（１９８５）
・伊藤義教「ペルシャ文化渡来考」岩波書店（１９８０）
・伊藤義教「ゾロアスター教論集」平河出版社（２００１）
・ヘロドトス　松平千秋訳「歴史」（上）岩波文庫（１９７２）
・辻直四郎編「ヴェーダ　アヴェスター」世界古典文学全集　筑摩書房（１９６７）
・福永光司「道教と日本思想」徳間書店（１９８５）
・松本清張「火の路」文芸春秋（１９７８）
・松本清張「ペルセポリスから飛鳥へ」日本放送出版協会（１９７９）
・松本清張「眩人」中央公論社（１９８０）

【筆者紹介】

武田収功（たけだかずよし）平成３０年４月入会。横浜市中区在住。

横歴月例発表会を毎回楽しみにしています。発表を聞くたびに新しい興味がわいて来ます。

趣味は染織です。草木染をした絹糸を使って佐賀錦を織っています。

月に一度、仕事で奈良県橿原市に行っています。仕事を終え、貸し自転車に乗り、明日香風や古人を感じながら、飛鳥を楽しんでいます。